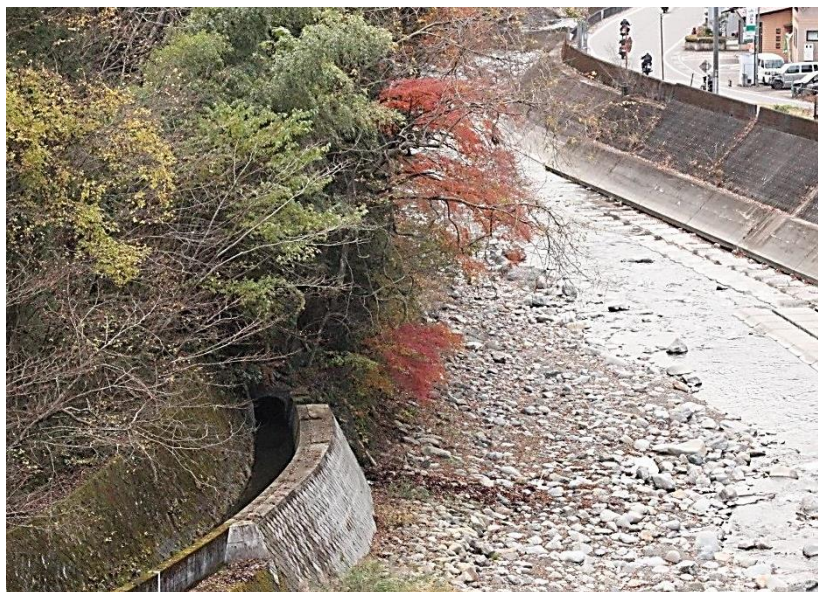


ようすいろ はなし
用水路の話

か ず の 葛野のせぎ



・ ・ ・ ようすいろ かずのがわ
せぎ(用水路)と葛野川



高岩の用水トンネル入口と葛野川、県道

この話は、大月市立七保
小学校四年生の社会科
学習の参考に作ったもので
す。

内容は、地域に残された
江戸時代の古文書と村絵
図を基にしています。その
ほかにも洪水被害の記録
がたくさん残っています。

それらを今日まで残し
伝えてくれたお陰でこのよ
うな話ができました。

葛野のせぎ^{かずの}

「だめだ、また取入れ口が流されちゃった。」
^{とりい} ^{ぐち} ^{なが(されてしまった)}

「田植えが終わったばかりだあにこまったことだ。」
^{たう} ^お ^{(なの)にこまったことだ}

「せぎもぶつこうれた所があるぞ。」(せぎ＝用水路)
^(こわれた) ^{ようすいろ}

「大雨のたんびにせぎ普請だ。」(普請＝工事)
^{おおあめ} ^(たびに) ^{ぶしん} ^{ふしん} ^{こうじ}

「お勝手の水にもこまるべえなあ。」(お勝手＝台所)
^{かって} ^{みず} ^(こまるだろう) ^{かって} ^{だいどころ}

大雨の後で川の様子を見に行ったお百しようさん
^{おおあめ} ^{あと} ^{かわ} ^{ようす} ^み ^い ^{ひやく}

たちは、口ぐちにそんな話をしていました。
^{くち} ^{はなし}

葛野、大島、下和田の葛野川ぞいには、田んぼが作られています。これらの田んぼは、い



つごろからあるのでしょうか。

100年前？ 200年前？ それとも、もっと大昔？

葛野とおおしまあ かずのむら しもわた た
んぼがいつごろからあったのか、せぎがいつごろつくら
れたのか、まだわかっていません。

けれども、350年ほど前（江戸時代1603〜1868年）の
た き かずのがわ さわ た
田んぼの記ろくには、葛野川ぞいと沢ぞいの田んぼ
ぜんぶあ かずのむら ななほしやう
を全部合わせると、そのころの葛野村には、七保小
がっこう こぶん やく
学校が12個分くらい、約933アールの田んぼがありま
した。七保小学校の五年生が毎年作っている田んぼ
ななほしやうがっこう ごねんせい まいとしつく
の300ばいいじようです。しもわたむら やく
下和田村にも約272アールの



田んぼがありました。

おかしな葛野村と下和田村には、こんなにたくさん田んぼがあったのです。

さて、田んぼを作るために、ぜったいに必要なものがあります。それは水です。たくさん田んぼを作るためには、大量の水が必要です。

田んぼに水を引くせぎを守るために、村の人びとは大変くろうしていました。

また、せぎの水は、田んぼの水だけでなく、飲み水や洗たくなどの人びとのくらしに必要な水でもありました。



江戸時代にえがかれた葛野村絵図

江戸時代には、今のよう^{いま}な上水道^{じょうすいどう}はありません。多くの水^{みづ}を使うためには、川^{かわ}や沢^{さわ}の水^{みづ}を

せぎ^{せぎ}やとい^ひで引^ひいてくること^{ほうほう}がいちばんよい方法^{ほうほう}でした。

江戸時代の葛野村^{えどじだい かつのむら}の絵図面^{えずめん}を見ると、葛野^{かつの}には「上せぎ^{うえ}」と「下せぎ^{した}」の二つ^{ふた}のせぎ^{せぎ}がありました。「上せぎ^{うえ}」は、取入れ口^{とりいぐち}が和田原^{わだばら}にあつて、そこから葛野^{かつの}、大島^{おおしま}、下和田^{しもわだ}の田^たんぼに水^{みづ}を引^ひいていました。「下せぎ^{した}」の取入れ口^{とりいぐち}は沖組^{おきぐみ}にあつて、そこから下組^{しもぐみ}まで続^{つづ}いて

ていました。

今の葛野川^{いま かつのがわ}の流れ^{なが}では、和田原^{わだばら}からも沖組^{おきぐみ}からもせぎ^{みづ}に水^{みづ}を引き入^ひれることはできま^いせん。そのころ水^{みづ}を引^ひくことができたのは、今^{いま}よりも高^{たか}いところを川^{かわ}が流^{なが}れていたから^{なが}です。

せぎ^{せぎ}にいつでも水^{みづ}が流^{なが}れてい^{ひと}れば、人^{ひと}びとは田んぼ^たにもくらしにもこ^たまりません。ところが、川^{かわ}や沢^{さわ}は大雨^{おおあめ}や台風^{たいふう}のときには大水^{おおみづ}が出て、い^でろいろなさい害^{がい}が起^おきます。せぎ^{せぎ}がこわ^{たは}れる。てい^たぼうがこわ^{たは}れる。田畑^{たはた}



もっこで運^{はこ}ぶ

なが
が流される。ときには人の命や家が失われることもあります。

えどじだい かずのむら しもわだむら ひと
江戸時代の葛野村、下和田村の人びとも、毎年のように大雨や葛野川のこう水にとて
もこまっていたいました。

かわ なが すこ
それだけではありません。川の流れば、少しずつ川をけずっていきます。そのために川底
がひくくなったり、川の流れば変わったりします。長い間には、和田原や沖組のあたりも
かわぞこ さ
川底が下がって、川の流ればひくくなってきました。そのためにせぎに水が入りにくくなっ
てきました。

かわ
「ずいぶん川が下がっちゃったなあ。」

（それなのに）おのみず （たびに）とりい （ぐちはこわれてしまいうし）
「それでえて大水のたんびに取入れ口やあぶつこうれるし。」

とりい （ぐちをもっと）かみ （すれば） （水をひくのはらくになるだろうに）
「取入れ口ようまっと上にすりやあ、みぞう引かあ楽になるべえに。」

わだばら かみ おおぐち （あたりに）とりい （ぐちをつくれないうか）
「和田原の上の大口のあたり取入れ口ようつくれにやあかなあ。」

「（おおぐちはいわばだぞ）（そんなにかんたんにはできないだろう）大口やあ岩場だあぞ。ほんな簡単にやあてきにやあべえ。」

「（いわをほれば）いま岩あほれりやあ、今よりいい水路が（すいろ）（できるだろう）できべえになあ。」

（おおぐち）大口というのは、七保橋が（ななほし）かかっている（ちか）近くの岩場のあたりです。

（てんめい）天明（1781〜1789年）（ねん）というころのことです。葛野村の村役人が集まって、上せぎの取入れ口を（ぐち）どうしたらよいか相談（そうだん）しました。
（むらびと）（村役人〓お百しよの代表）

（むらびと）村人のくろうをへらすためには、大口の岩をほりぬいて、取入れ口をもっと上流にする（むらびと）ほうがよいと考えました。
（かんが）

（こうじ）けれども、その工事をするためにはたくさんのお金がかかります。役所のお金を出してもらえますが、それだけではたりません。村でもはたらく人を出したり、材木を出したりしなければなりません。そのためにはたくさんのお金が必要で（か）す。

ところが、大変（たいへん）こまったことに、そのころは「天明（てんめい）のききん」といわれる、江戸時代（えどじだい）に起き

たもつとも大きなききんで、日本中のお百しようさんが
くらしにこまっていたいました。ですから、村では工事のお金
を出すことはとてもできません。

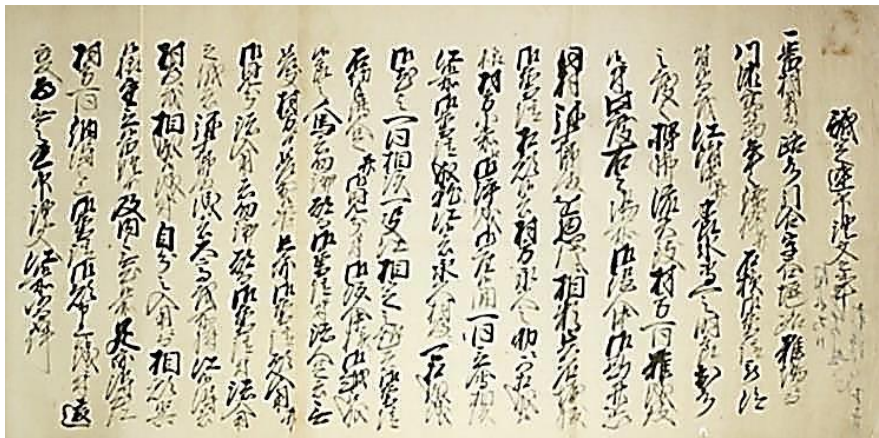
そこで、村役人たちは、土地をたくさん持っている
弥十郎さんに代表になつてもらつて、役所へお願いした
り、お金を出してもらつたりするようにたのんでみるこ
とにしました。

「大口の岩にあななんかほれるづらか。」

と心配するお百しようさんもいましたが、

「がんばりやあ、あんとかなるだろう。」

「銭やあ出せにやあけんど、岩ほりの手つじやあなら



弥十郎さんと村人の相談の記

（できるだろう）
「できべえ。」

（やま ざいもく（だすのは））
「山から材木出さあなれてるぞ。」

（やくにん （ときには） うま （やりますよ））
「お役人が来るときやあ、馬を出してやるべえ。」

（できることは） （なんでもてつだいましょう）
「できることあ、あんでも手つじやあべえ。」

（むらじゅう ひやく てつだ）
と、村中のお百しようさんもみんなて手伝うやくそくをしました。



いわほり

（やじゅうろう おおあめ）
弥十郎さんも、大雨のたびにこわれている取入れ口やせぎのことを心配していました。

（よ むら）
せぎが良くなれば、村の人たちのくらしが楽になり、村のしょうらいのためにも良いことで

す。みんなのためになることなら、少しでも早く工事ができるようにしようと、弥十郎さ

（おも）
んは思いました。それで、工事に必要なお金を全部出してくれることになりました。

（のうぎよう やす ふゆ こうじ いま おお きかい すず どうぐ）
農業が休みになる冬に工事をしました。今のような大がたの機械も進んだ道具もない

ときですから、つちとのみだけで岩をほるのはとても大変でした。けれども、村のお百しよ

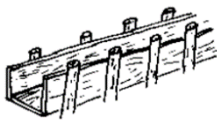
うさんみんなが協力して工事が進みました。

寛政元(1789)年、大口に水を通す「ほりぬき」(トンネル)ができました。新しい取入れ口もできました。そこへ箱といをかけて、川の水を引き入れました。

水を引きやすくなったので、これでせぎの心配がなくなると、お百しようさんたちはみんなで大よろこびしました。

それから30年もたちました。文政4(1821)年の5月(今のこよみでは6月)のことです。

毎年大水でこまっていた葛野川ですが、この年はちがいました。梅雨時になっても、なかなか雨がふりません。川や沢の水がだんだん少なくなってきた



はこ箱とい



おおくち大口のほりぬき

ました。取入れ口よりひくい所を川の水が流れています。これでは田んぼに水を引くことができません。田植えができなくなっています。

お百しようさんたちは、晴れわたった空を見上げていました。

「このまんまじゃあ、今年やあ田植えができなくなつち

まあぞ。」

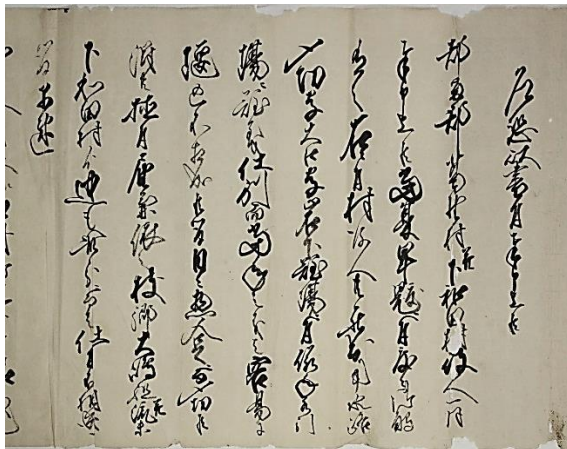
「あんとかして水を引けにやあかなあ。」

「あんとかつたつて、雨がふらなきやあ、どうしようもないだろう。」

「麦やあ取れたから、ききんにやあならにやあけんど、

米もできなきやあこまるぞ。」

「大雨もこまるけんど、日照りにもみやあつたなあ。」



文政4年の日照りのようすを書いたほうこく書

来る日も来る日も、青空ばかりが広がっていました。

とくに大島と下和田は、せぎの下流になるので、ふだんでもせぎの水が少なくなります。水ぶそくになれば、せぎにはまったく水が来なくなります。大島と下和田の人たちは、とても心配でした。

田んぼに早く水を入れなければ、今年の米作りはみんなできなくなります。雨がふるのをこれいじよう待ってられません。

そこで、お百しようさんたちは、川の水をせき止めて、せぎへ水を引きこぶことにしました。たたみを28まい、むしろを100まい集めて、それを大口のすぐ上流の高岩下の川原に運びました。川の中にたたみとおしろをならべたりしきつめたり、石をのせたりならべたり、くいをうって止めたりしました。そうして、川の水をせぎに引きこみました。いつもとくらべれば、とても少ない水ですが、ようやくせぎに水が流れました。

水が少ないので、水の取り合いが起きないように、村役人たちが昼も夜もこうたいで田



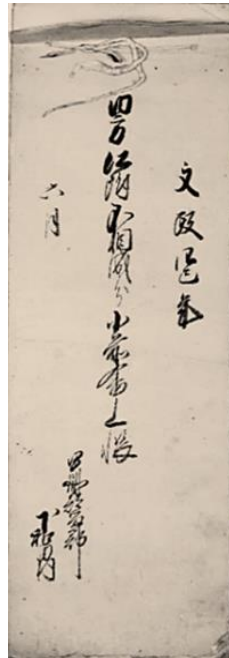
川の水をせき止める

んぼに水^{みず}を入れていききました。そうして21日^{にち}かかって、6月^{がつ}16日^{にち}（今^{いま}のこよみでは7月^{がつ}15日^{にち}）に葛野^{かずの}から下^{しも}和田^{わだ}までのせぎぞいの田^たんぼに水^{みず}を入れることができました。

お百^{ひゃく}しようさんたちは、みんなで協力^{きょうりよく}して田植^{たう}えをしました。

みんなのくろうのおかげで田植^{たう}えをすることができました。けれども、そのあとも雨^{あめ}がふらなくて、秋^{あき}になっても米^{こめ}はあまりとれませんでした。

じつはこの文政^{ぶんせい}4（1821）年^{ねん}の夏^{なつ}は、日本中^{にほんじゅう}で雨^{あめ}が少^{すく}なくて、日照^{ひで}りでこまった年^{とし}でした。この地^ちいきでも、田^たんぼでは米^{こめ}が、畑^{はたけ}では夏^{なつ}のやさいが少^{すく}しかとれませんでした。クワの



文政4年の作物のようすを書いたほうこく書^{しよ}

葉も育たなくて、ようさんもあまりできませんでした。

(ようさんⅡカイコを育てて、まゆを取る仕事)

大水にも日照りにもこまる米作りですが、また川のようにすが変わってきました。大口をほる前と同じように、川が少しずつ下がってきて、大口では水を引きにくくなったのです。

「このままでは、また昔のように取入れ口の普請ばかりしなければならぬ。昔は大口のほりぬきができればよいと考えていた。そして、みんなで大口の岩をほったけれど、今度はさらに上流の高岩をほって、その上流から水を引かなければならなくなった。高岩の岩はかたくて長くて、おれたちの力ではほれない。これはこまった。」

村の人びとはこんな心配をするようになりました。

大口のほりぬきができて35年後の文政7(1824)年のことです。

「いよいよせき水がひやあらなくなっちゃった。このまんまじゃあ、田ん



うちとのみ

（つくれなくなってしまう）
ぼをこしらえなくなつちまあ。高岩あほつて、新しい取入れ口をつくらにやあと。」

そのように考えた村の人びとは、高岩にもほりぬきをつくることを決めました。

村役人が役所に工事のお願いをしました。今度も役所でお金を出してくれることになりました。けれども、かたい岩をどうやってほればよいのかわかりません。それがこまった問題でした。

ところが運の良いことに、ちようどそのころ鶴瀬村（甲州市）に奥州（東北地方）から「金ほり軍治郎」というほりぬき工事の名人が来ていました。すぐに軍治郎さんに来てもらつて、高岩にほりぬきをつくることができるかどうか見てもらいました。

軍治郎さんは、

「とてもかたい岩だが、いっしょうけんめいやれば、ほれないことはない。ほるところをたきぎで焼けば、岩がわれやすくなる。そのあとをほればよいだろう。」

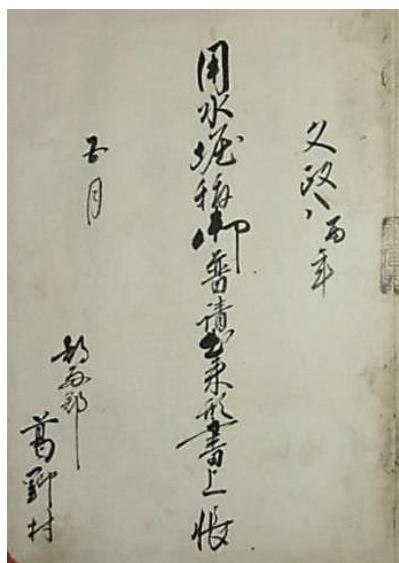
と教えてくれました。

ぐんじろう
軍治郎さんが葛野のかずの
にこうじがはじまりました。に
工事が始まりました。

たかいわ いわば
高岩の岩場をほる工事はとても大変でした
が、岩ほりだけでものべ1800人以上の人がはたら
いて、長さ50メートルほどのほりぬきができま
した。

そして、取入れ口から下和田の田んぼのはし
までおよそ3キロメートルという、とても長い今のせぎの
つぎとしぶんせい
次の年、文政8(1825)年の五月、葛野川ぞいの田んぼには、どこもたつぷりの水が
ながいま
ま
ありました。

それから200年でも過ぎました。取入れ口はさらに上流になりました。今も高岩と大口の



たかいわ こうじ お
高岩の工事が終わったほうこく書

ほりぬきを通った水が葛野のせぎを流れています。昔の
ひとびとがくろうしてつくり、長い間まもってきた葛野のせぎ
は、今も地いきの人びとの役に立っています。

今の取入れ口や用水路は、コンクリートでつくられてい
ます。川がひくくならないように大きなていぼうもつくられ
ています。取入れ口やとちゅうの排水路は、流れのようすに
あわせて開けたり閉めたりすることができます。せぎがこ
われることもありません。昔にくらべると心配が少なくな
りました。

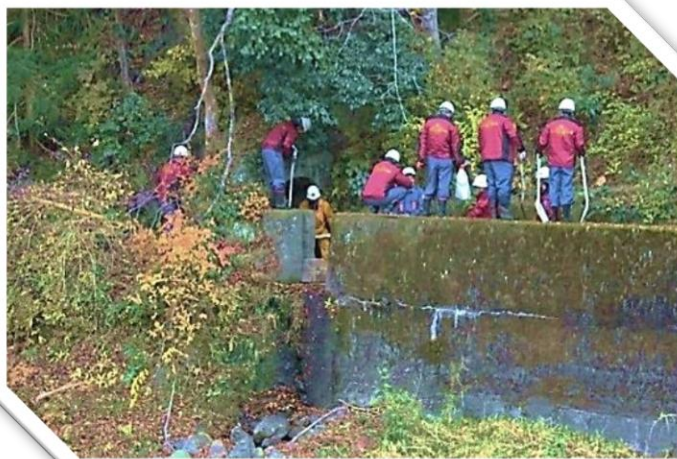
葛野から下和田まで、今は田んぼが少なくなりました。けれども、農業に必要な水が流
れているとても大切なせぎです。火事が起きたときに役立つ防火用水にもなっています。



とりのりぐちのあたりのかわらのようす



けんどう ひと
県道ぞいのせぎのそうじをする人たち



たかいわ ようすい でぐち しょうぼうだん
高岩の用水トンネル出口のそうじをする消防団

まいとし
毎年、田んぼをつくる人たち、地いきの役員や消防団の人たちが点検をしたり、せぎぞい
ひと
の人たちがみんなでそうじをしたりして、地いきのみんなでせぎを守っています。

と
り
い
ぐ
ち
取
入
れ
口



た
か
い
わ
よ
う
す
い
高
岩
の
用
水
ト
ン
ネ
ル

用水路の話 葛野のせぎ

発行日 2024年9月25日(第3版)

著 者 鈴 木 英 夫

発 行 大月市郷土資料館

〒409-0614 山梨県大月市猿橋町猿橋313-2

Tel 0554-23-1511

不許複製 無断転載を禁ず